

企画名： 「前進！フクシマっ子－これからの未来に出来る事－」

実施日時： 2012年1月14日 17:00～18:30

実施場所： パシフィコ横浜会議センター 4F 416+417

登壇者： 江川和弥（特定非営利活動法人 寺子屋方丈舎 理事長）

服部智深（特定非営利活動法人 寺子屋方丈舎 環境教育部）

被災地在住の子ども 福島市小学6年生男子 郡山市在住小学5年生女子

檜葉町出身・現会津美里町仮設在住小学2年生女子

参加人数： 約60名前後

文責： 服部智深（特定非営利活動法人 寺子屋方丈舎 環境教育部）

目的

- 1、 子どもの視点で事実を語る事で、イデオロギーや大人の思いにとらわれない、「福島」の現状の情報発信を意図した
- 2、 福島の子どもの自らの声で大人（われわれ関係者も含む）へ責任を問う。
- 3、 次の時代をになう子どもの意見を、ポスト原発＝ポスト成長社会へのメッセージとして伝えたかった。

発表内容

福島の被災状況や避難者の現状について及び子どもの支援活動について報告。

「子どもから見たフクシマ」トークセッション及び会場から子どもたちへの質疑応答。

子どもたちから、被災当時の混乱や今後の生活に対する不安、支援を受けた事への感謝の気持ち、漠然とした不安や漠然とした安心感、何が起きたのか十分に理解できないまま避難と転校などの環境変化が繰り返されている現状など、様々な状況や思いが発せられた。それぞれの親からも文書を通じて不安な訴えや、我が子に負わされた負担について悲観的な思いが寄せられた。

会場からは原発を誘致してきた世代の方からの反応が多く見られた。中には、今回のような悲劇を想定せずに誘致した事・誘致に際して無関心でいた事に対する謝罪や、子どもたちの登壇や発言に対する感謝の気持ち・激励も聞かれた。直接的な支援をしたくても、活動内容が若者に限定されやすい為に、直接支援に携われないという意見も寄せられた。学生層からは、福島県内での支援が終息傾向にある事への危機感が伝わった事で、再度支援の必要性の意識が芽生えるきっかけとなった。

支援活動の一環として行っているキャンプの写真のスライドショーを流し、久しぶりに屋外で遊べた

子どもたちの様子を説明。現在抑制されている屋外での遊びが子どもたちにとって、学びや成長のための重要な機会となっている事を紹介。

課題として大人が次世代に何をつなぐのかが具体化できなかった。

NPOとして、今後も情報を発信し続ける事や子どもの社会参画を通して、復興計画に福島の子どもの声を反映させていくことが必要である。また、県外避難の子どもと県内に残る子どもを、共につなぎ合える場を設定し、ワークショップの運営などを通じて福島県へ提案していく。

